

[書 評]

フェティシズム研究第1巻 フェティシズム論の系譜と展望

[田中雅一編, 京都, 京都大学学術出版会, 2009年, 379頁, 4410円。]

小 川 さやか

(日本学術振興会特別研究員・京都大学大学院文学研究科)

「フェティシズムとは困難な問いである」。編者である田中は、序論でこのように述べている。本書のなかで繰り返して述べられているように、フェティシズムは、宗教(呪術・物神)、経済(商品フェティシズム)、性(節片淫乱症)の三領域において使用されてきた概念である。この三領域においてフェティシズムには、「真実」あるいは本来の「価値」が否定/隠蔽されて全く別のもの(モノ)がそうした真実や価値をもつものとみなされるという、取り違えや誤認、ずれを示す用語」[p. 9]という共通性が認められる。そのため、本書をフェティシズムにおける取り違えや誤認、ずれを暴くような議論を展開するものとして、紐解く読者もいるだろう。だが、本書の目的はフェティシズムの「いかがわしさ」に対する批判にはない。むしろ本書は、フェティシズムを「いかがわしい」ものとして論じてきた近代主義的思考を批判することを目指すものである。

近代主義的思考は、様々な対概念(理性と感情、合理と非合理、精神と身体、個人と集団、白人と非白人、男性と女性、人とモノなど)において、一方をつねに他方の優位に位置づける非対称的な対立図式を生みだしてきた。またこの非対称的な図式はつねに一方を能動的主体、他

方を受動的客体と固定化してきた。本書は、方法論的フェティシズムの立場から、こうした一連の非対称的な図式の背後にある、理性的な個人中心主義や人間中心主義、あるいは道具的世界観に対して異議申し立てをおこなうものである。しかし冒頭で述べた本書の困難は、この異議申し立てを行うことだけにあるのではなく、その返す刀で、現代社会を支配しようとする上記三領域が複雑に絡み合ったフェティシズム現象をも批判しようとする試みにある。冒頭に挙げた田中の言葉はつぎのようにつづく。「フェティシズムは私たちにこれからの生き方を示唆し、新たな人間像、他者・モノ・自然との関係を呈示すると同時に、批判すべき対象として立ち現れる」[p. 26]。

近代主義的思考に支配されてきた学術領域、われわれの思考や行動様式を攪乱しようとする本書の企ては、野心的なものである。とくに本書は、京都大学人文科学研究所共同研究班による研究プロジェクトの集大成『フェティシズム』シリーズ三巻のうち、理論的な問題を扱う巻として位置づけられており、各分野の気鋭の研究者により大変興味深い議論が展開されている。本書の構成は以下の通りである。

はじめに 序章 田中雅一「フェティシズム研究の課題と展望」

第Ⅰ部 フェティシズム研究の系譜

- 第1章 村上辰雄「宗教としてのフェティシズム——近代「宗教」概念理解への一つのアプローチ」
- 第2章 佐藤啓介「モノを否定する，モノが否定する——現代キリスト教形象論からみた「否定的フェティシズムの可能性」
- 第3章 新宮一成「精神分析学からみたフェティシズム——フロイトは何を発見したのか」
- 第4章 齊藤光「性的フェティシズム」概念と日本語文化圏——吳秀三・谷崎潤一郎による「性的フェティシズム」の具現化まで」

第Ⅱ部 フェティシズムとモノ研究

- 第5章 大西秀之「モノ愛でるコトバを超えて——語りえぬ日常世界の社会的実践」
- 第6章 足立明「人とモノのネットワーク——モノを取り戻すこと」
- 第7章 森田敦郎「モノをめぐる実践のトポロジー——タイの機械技術からみた「人間のフェティシズム」批判」
- 第8章 伊藤遊「考現学における断片化と再構築——〈キッチン考現学〉における風景の蒐集」

第Ⅲ部 フェティシズム研究の展望

- 第9章 松田素二「平和のフェティシズム考——文化的フェティシズムの新たな地平」
- 第10章 春日直樹「フェティシズムとマジカルリアリズム——タウシグの著作をめぐる覚え書きとして」
- 第11章 箭内匡「事物との濃密で幻想的な関係——存在論的テリトリー論に向けて」
- 第12章 青木恵理子「親密性と身体——フェティシズム現象と人類学の地平」

第Ⅰ部『フェティシズム研究の系譜』では、西洋近代の言説におけるフェティシズム/フェティッシュ概念の系譜について、宗教および精神分析学に注目して論じている。

第1章は、西洋のキリスト教と宗教学における偶像崇拜とフェティッシュの関係をめぐる言説の検討を中心に、そこでのフェティシズムの布置を明らかにしている。その上で、村上は、「文明人」が己を文明人と理解するために「未開人」を必要としたように、フェティシズムが「近代宗教」の不可欠な影の部分（近代的思考における否定的な対概念）を担ってきた点に着目し、フェティシズムが近代言説の生んだ様々な概念を批判する拠点として今日その重要性が注目されているとしている。

第2章は、否定神学を経由したキリスト教形象論において「神」と「モノ」がともに「異他なるもの」として顕現する地平を検討することを通して、「モノが人を魅了する」という一般的に流布しているフェティシズムに対し、「モノが人を否定する」経験を明らかにしている。佐藤がキリスト教形象論を手がかりに示唆する「モノの他性」は、宗教学の枠組みを超えて、フェティシズム概念の多様性を理解するうえで興味深いものである。

第3章は、性的フェティシズム論を確立させたフロイト理論の核心的命題「フェティッシュは母のファルスの代用品である」をめぐる、「フェティッシュとは幻覚の経験の痛みを錯覚の方向へと和らげるために編み出された工夫である」こと、および、フェティッシュにはウィニコットの「移行対象」のように「外的現実なのか想像の産物なのかを問いつまれない」事象が伏在することを論じ、フェティッシュを「在と不在」の弁証法の原点であるとみなす視座を論じる。

第4章は、西欧の精神分析学において発達したフェティシズム概念がいかにして日本語文化圏に導入されたのかを、クラフト＝エビングの『性的精神病質』の移入・受容過程に着目して明らかにしている。本章における日

本のフェティシズム研究の系譜学は、「フェチ」や「萌え」などの用語が広く定着した日本社会において、性的フェティシズムを理解するうえで重要な背景知となるものである。

第Ⅱ部「フェティシズムとモノ研究」は、人とモノとの関係をめぐる脱言語中心的/脱人間中心的な理解を目指した4本の論文が集められている。

第5章では、「言語論的転回」以降、人類学がモノをはじめとする言語以外の対象に対する関心を喪失してしまった点を批判的に検討している。また、ブルデューの実践理論や、レイヴとウェンガーの「実践共同体」等の概念を援用し知識や技能による言語化しがたい実践や身体経験への回帰を志向する近年の研究に対しても、批判を試みている。行為の当事者が言語化できない実践について、非言語的な知識や技能が介在しているとするのはトートロジーであると批判するのである。これらを踏まえて、大西は物理的環境と密接に関わる生業・生産活動に注目し、いかに世界が言語を介さない無数のモノの働きかけにより成立しているかを論じている。

第6章と第7章では、類似した方法論を用いて、人とモノとを非対称的に扱う人間中心主義を批判している。第6章では、「フェティッシュなるものは存在するのか」という問いかけから始まっている。フェティシズム概念は、「人=主体」「モノ=客体」という二元論に基づき、主客の逆転を誤謬・迷信・倒錯とする西欧近代的な存在論を前提としている。そのため、人とモノの協働性や相互浸透性を考慮に入れると、フェティシズム概念は意味をなさなくなる。足立は、ワーチの活動理論やラトゥールらのアクター・ネットワーク論を援用し、世界が人とモノ相互のエイジェンシーが多様に変化・創発しあうことで成立している事実をわれわれを立ち返らせ、またそこからフェティシズムが生成する過程を明らかにしようとしているのである。

第7章は、足立が整理した上記の方法論を

具体的事例に応用したものである。マルクス主義におけるフェティシズム論の要点は、モノがそれを生産した人間と切り離されて独自の価値をもつ自律的なエイジェントとして扱われることで、そのモノを生産した人間の価値が隠蔽されてしまうことにある。森田は、これを転倒させ、モノと切り離して人間に能力を帰属させる考え方を「人間のフェティシズム」と呼び、その批判を試みる。森田は、タイの地場機械工場の複雑な空間構成(トポロジー)を描き出し、機械工の「能力」がいかに工作機械や工具、原料などの多数のモノとの協働、そして協働の連鎖を支える作業場のアレンジメントから生みだされるのかを明らかにしている。また森田は以上の意味での機械工の「能力」の多様なあり方がかれらの個性や集合性を形成することも指摘している。

第8章では、近年、流行している「珍紀行」「工場萌え」など「キッチュ」なモノを撮影し、その写真を蒐集する旅を扱う。伊藤は、そのルーツには、日常生活空間の断片情報の蒐集を目的としていた考現学があるとし、この「旅」をその「末裔」による〈キッチュ考現学〉と名づける。「旅」も考現学も、風景のトポスを無視して場から対象を切り離し、対象をその物質的特徴によって新たな連関に組み入れ、所有するという点で共通する。伊藤はこの物質的差異の追求にフェティシズムとの類似性を指摘し、特定の美観のもとに日常生活を「瑣末なもの」と排除する見方に対するオルタナティブとしての可能性を、キッチュ考現学に見出す。

第Ⅲ部は、フェティシズムが学術領域および、われわれの現在の生き方に対して持ちうる可能性を示す4本の論文で構成されている。

第9章では、従来、批判的に扱われてきた文化的フェティシズムの可能性が示されている。松田が取り上げているのは、平和公園の「外」に建てられた朝鮮人被爆者の慰霊碑や、朝鮮人被爆者には「紙切れ」同然の意味しかなさない被爆者健康手帳である。これらの碑

や手帳は、朝鮮人被爆者が日本政府から背負わされた苦難の生・差別を象徴する「呪物」であった。しかし碑や手帳といったモノに仮託された人々の苦難の生は、モノがモノ的に解決される（碑が公園内に移設されるなど）と、その生にまつわる困難まで解決されたかのような誤認をもたらす。この誤認は、元来、非同一なものをモノを媒介にして同一なものに転換することでその実体的差異を隠蔽する、文化的フェティシズムそのもののうちに胚胎する。松田はこの文化的フェティシズムの陥穽を鋭く指摘したうえで、彼らが自分たちの経験を集合的な物語として範型化していく過程、すなわち声のフェティッシュ化（呪文化）に、モノのフェティッシュ化とは異なる新たな可能性を見いだそうとしているのである。

第10章は、人類学者タウシッグの著作を再検討するとともに、フェティシズム研究におけるマジカルリアリズムの手法の有効性を指摘する。タウシッグは南米の農民のあいだで資本主義の発展がいかに悪魔のイメージを生みだすかを記述することで、農民にみられるフェティシズムと近代社会の商品フェティシズムとを鮮やかに対置した。しかし、その後、その手法は「資本主義」対「前資本主義」の逆像関係にすぎないと批判された。春日はジジク、ピーツ、ジェームソン、バーバによるフェティシズムの弁証法的理解を手がかりに、タウシッグの静的な図式を、その図式の生成過程における主体の不確定化とステレオタイプへの固執に着目して再評価する。また反異種混淆的な性向を宿すフェティシズムを論じるにあたって、異種混淆性との同居を可能にし、フェティシズム自体に不確定で非同一的な性格を付与するマジカルリアリズムの可能性を主張する。

第11章は、性的フェティシズムの概念を確立した心理学者ビネの論文、オーストリアの作家マゾッホの文学、南米の先住民マプーチェの呪術＝宗教実践、そしてブニュエルの映画という異質な素材を横断し、それらを接

合せせるなかで、フェティシズムの特質を「事物との濃密で幻想的な関係の営み」として浮かびあがらせている。筋内は、性的フェティシズムと宗教フェティシズムを包括させる枠組みには、「存在論的テリトリー性」の問題があると指摘する。愛情という通常、精神的とみなされるものの背後に、常にその物質的な基盤となりうる萌芽的なフェティシズムの存在があり、また至高神への信仰と生存のための地上的な霊への信仰が併存するように、人間は肉体的存在として生きるために物質的な足がかり（テリトリー）を必要とする。筋内はこうした人間存在の根源的事実にこそ、フェティシズムを読み解く鍵があることを主張している。

第12章も、こうした人間存在の根源的事実にかかわる議論を展開している。青木は、公共圏と親密圏という西洋近代の補完対が生にまつわる近代固有の様々な対概念と共振している事実を指摘し、その背景には文化人類学がロゴス中心主義的な視点で親密圏を捉えてきたことがあると批判する。青木は、フェティシズム現象をロゴス中心主義から解放するために、生の位相を根源的位相と現象的位相のふたつに分ける。老人介護などの事例から示される「生の根源的位相」とは、「からだの共生」、すなわち言語を超えた間身体的な共有性である。ここでは、「分節性/記号生/ロゴス性」に基づく生の現象的位相とは異なり、親密性と公共性の対置や、身体と精神の対置、人と人、人とモノのあいだの一義的な主客の関係などはない。この位相におけるフェティシズムは、グローバル資本主義システムと生一権力に浸された現代において、むしろ回復されるべきものでさえあるのである。

以上で概観したように、各論文はいずれもフェティシズムを切り口に、近代主義的思考を批判し、それを乗り越えようという果敢な議論を展開している。ただし、序章において田中が述べるように、各執筆者は必ずしもフェ

ティシズムに関して統一的な見解を示しているわけではない。本書では、「それぞれのフェティシズム」がそれぞれの議論を展開しており、それゆえにフェティシズムが広範囲で方法論的に有効であることを提示している。つまり、本書は、フェティシズムに対する統合的な見解の構築を目指すよりも、フェティシズムを触媒として閉塞状況にある学術の議論を活性化させることを企図したものである。この多様かつ広範なフェティシズム論をふくむ本書を読み解く手がかりはいくつかあると思われるが、評者は下記の切り口で読み解いてみた。以下で、評者の関心に従いⅡ部とⅢ部のいくつかの論文に注目して、この点について簡潔に述べておきたい。

大枠で、第Ⅱ部はモノの側からのアプローチを、第Ⅲ部は人の側からのアプローチを採用している。第Ⅱ部・第6章で、足立は、科学技術を対象にしてきたアクター・ネットワーク論は、人の側のさまざまな襞や深みをあまり問題にしてこなかったと指摘し [p. 184]、人の側からの視点を加えて刷新しつつも、モノと人との対称的な関係を重視する立場から、人の欲望・情動・感情的な側面に対しては控えめな記述をおこなっている。この傾向は、第7章の森田の「人間のフェティシズム」批判にも顕著にみられる。森田は、新自由主義的イデオロギーを支えている、行為の帰結を人間の内的属性にのみ求める能力主義を批判するという目的を徹底するために、タイの機械工がモノや空間アレンジメントに対峙するときの創意や快/不快といった感情に踏み込むことにも慎重な姿勢をみせているようである。一方で、第Ⅲ部・第11章の箭内が論じる「存在論的テリトリー性」では、事物に対する人の生々しい感情に注目し、肉体的=物質的にしか生きられない人間存在の根本的事実において、フェティッシュが生成し、人とモノとが対称的になる地平を見ている。また12章の青木も、人と人、人とモノとを一義的な関係のもとに固定化する「分節

性/ロゴス性/記号性」を剥ぎ取る過程の先にある生の「根源的位相」において、人とモノとが融即する地点を描いている。

編者の田中は、フェティッシュという欲望のネットワークに関わる自身の視座を、「人間中心主義を批判する足立や森田の議論と呼応しつつも、モノと人との関係に「アフォーダンス」概念などに還元できない両極的感情を想定している点で異なる」 [p. 21] と述べ、箭内や青木の論文に人とモノとの関係における、フェティシズムの核心を見ている [pp. 21-22]。評者も田中と同じく両論文に共感を抱いた。しかし両論文には本書で示されたフェティシズムの多様な可能性を、本質的なレベルへとひとつに収斂させていくような作用がみとめられる。フェティシズムによる、学術研究における新たな議論の活性化の可能性を重くみるならば、このような作用については慎重になる必要があるだろう。フェティシズムを切り口に近代主義的思考に異議申し立てをおこなおうとする試みが、逆説的に近代主義的思考にフェティシズムを閉じ込めてしまうこともある。

青木が「根源的位相」に対置させて「現象的位相」と名付けた位相で、分節性/ロゴス性/記号性と戯れるフェティッシュの魅惑については、評者は、たとえば第8章の伊藤が見出した「キッチュ考現学」に示されていると考える。〈キッチュ考現学〉の〈キッチュ〉性は、モノのモノとしての不可解さや魅惑を、モノの置かれた文脈を無視して蒐集し、モノに対する新たな意味づけをおこなうことなしに、モノを私的に構築した連関に放り投げるところにあった。評者は考現学における思考様式や記述・表象のそのものにフェティッシュを感じた。考現学は特定の理論に回収されることはなかった。フェティシズムにも一元的な思考様式や理論に回収されることを本源的な部分で決定的に拒むような遊戯・魅力=可能性があるのではないだろうか。評者は、ここにフェティシズムが既存の学術領域を攪

乱し、新たな領域を開いていく可能性の一端があるように思えた。

本書の企ては野心的である。本書を読了した後、フェティシズムが今後、学問領域にお

いて無視することのできない重要な位置づけを獲得していくと考える者は少なくないだろ

う。